

5-6. 産業の復旧・復興

1. 金融面の対応

01. 伊達商工会「元氣回復ガンバル商品券」に地域振興活性化事業の指定がされた。

伊達商工会議所は、有珠山噴火の経済復興対策として打ち出している「元氣回復ガンバル推進プロジェクト事業」の一環として、1割増しのプレミアム付き「元氣回復ガンバル商品券」を9月4日から販売する。道通産局の地域振興活性化事業の指定も受け、有珠山噴火からの復興をメインに取り組む。

商品券の額面金額は1枚千円。この商品券が11枚入る袋(1万1千円相当)を1万円で購入することができる。購入限度額は1人最低1万円から最高10万円(10袋、11万円相当)まで。伊達商工会議所会員事業所会員などポスター表示の市内約800事業所で利用できる。実施時期は9月4日から11月末日まで。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.284]

02. 日本政策投資銀行が火山活動関連災害特別相談窓口を開設した。

北海道開発局の要請により、日本政策投資銀行は北海道支店に火山活動関連災害特別相談窓口を開設し、災害に伴う設備等の復旧資金の相談に応じることにした。[『平成12年(2000年)有珠山噴火災害報告』北海道開発局室蘭開発建設部(2000/12),p.60]

03. 通商産業省が被災中小企業に対する災害融資に係る特別措置等の延長を行った。

有珠山噴火災害により被害を受けた中小企業者等に対して、平成12年6月9日の閣議決定により政府系金融機関の災害融資の特別措置及び著しい被害を受けた者に対するの無利子について、噴火活動が継続しており、被災中小企業の復旧及び業況の回復が著しく遅れていることから、その適用期限を半年間延長する。

[経済産業省 HP (<http://www.meti.go.jp/kohosys/press/0001215/>)、2003/3/31 現在]

2. 洞爺湖温泉街の再開

01. *7月10日、虻田町洞爺湖温泉街で噴火以来、約100日ぶりにホテルが営業を開始した。

6日に避難指示が一時解除となった洞爺湖温泉東側地区に建つ2件の大型ホテルが、観光客の受け入れを始めた。有珠山噴火以来、およそ100日ぶりの本格営業となる。

営業再開したのは、道道洞爺湖登別線沿いの洞爺パークホテル天翔(280室)とトーヤ温泉ホテル(76室)。6日に避難解除になった地区には7件のホテル・旅館があり、10日再開の2軒を除く5軒も今月中に再開する予定。

町は現在、緊急時の避難路の確保や除灰作業が進められているため、大型バスの通行を規制するほか、観光客の通行は再開のホテル・旅館へ向かう観光客のみとする。

営業を再開した両ホテルとも、10日午前中から従業員が観光客の受け入れ準備に追われた。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.263]

虻田町は10日、有珠山噴火による避難指示を解除した洞爺湖温泉街の東部で、避難指示から103日ぶりに観光客の受け入れを正式に再開した。夕方時点での宿泊客は約90人になった。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.266]

02. 洞爺湖温泉町東側地域の避難指示解除により、洞爺湖温泉街東側の大部分で営業が再開された。

虻田町は14日午前、有珠山の噴火で洞爺湖温泉街東側地域の338世帯502人に出していた避難指示を解除した。これで観光施設が集中している温泉街東側の大部分が解除され、温泉街で一般客を受け入れている宿泊施設20軒のうち15軒が再開可能となる。残る避難対象住民は680世帯、1432人。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.268]

03. 7月20日、洞爺湖温泉～洞爺湖中島間の遊覧船の運行が再開された。

洞爺湖観光の魅力の一つ、洞爺湖汽船による湖上遊覧船は、噴火後洞爺村の棧橋から運行を再開していた。その後、洞爺湖温泉地区の避難指示解除に合わせ同地区発着の中島周遊ルートの再開に向け、準備を進めていた。温泉街西側湖畔の駅前棧橋は噴火による地殻変動で70センチほど隆起し、着船に支障が出ているため、本社前棧橋からの発着に切り替えて再開した。

同社では通常の半分に当たる1時間に1便、1日8便態勢で中島遊覧を当面実施し、乗客の推移をみて便数を増やす予定だ。(中略)

現在、中島の売店や飲食店は閉店状態だが、遊覧船が30分おきに発着する場合には通常の運航体制に復帰する。さらに当面は洞爺村からの遊覧船運航も継続するという。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.272]

04. 8月1日、道南バスが洞爺湖温泉街を経由する2路線の運行を再開した。

再開された路線は、洞爺湖駅前発 - 洞爺湖温泉線と洞爺湖温泉発 - 登別温泉経由 - 新千歳空港行きのオロフレ峠線。温泉線は豊浦経由で運行され、洞爺湖協会病院前と桜町の停留所で止まる。洞爺湖温泉町西側の道南バスターミナルは、灰が積もっているため当面使用せず、同ターミナルから約150メートル離れた桜町停留所が発着点になった。運行再開初日のこの日、おなじみの緑色のバスが温泉街のメインストリートをほぼ4ヶ月ぶりに行き来し、住民らは最寄りのバス停から乗り込んでいた。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.278]

05. 2001年2月3日、洞爺湖温泉観光協会が洞爺湖温泉街の復興計画を策定した。

有珠山噴火で大きな被害を受けた洞爺湖温泉観光協会は、「温泉街住民の視点に立った具体的な」復興計画をまとめた。にぎわい創出、火山を観光資源とする「環洞爺湖エコミュージアム構想」の具体策を提起、さらに災害復興計画を実現させるための条例制定や防災管理マニュアル作成などを求めている。同協会は町や道に近く提出する一方、同計画を広く町民に公開していくことにしている。[『室蘭民報』(2001/2/3 朝刊)]

06. 2001年3月10日、洞爺湖温泉観光協会加盟ホテル・旅館が全て営業を再開した。

昨年3月の有珠山噴火以来休業していた虻田町洞爺湖温泉町の洞爺プリンスホテル湖畔亭が10日から営業を再開した。これにより洞爺湖温泉観光協会に加盟するホテル・旅館17カ所がすべて出そろった。

同ホテルは、地殻変動による配水パイプの漏水で地下室が水没、機械設備に大きな被害を受け、復旧へ向け工事が行われていた。

(中略)

この日は週末とあって、220の客室は予約でほぼ満杯の状態。大半が道内の個人客で、フロントでは部屋割りなどの打ち合わせがひっきりなしに続き、道内屈指のリゾート地にふさわしく、活気が漂っている。[『室蘭民報』(2001/3/11 朝刊)]

3. 観光キャンペーン

01. 虻田町と洞爺湖温泉観光協会は、7月9日に「観光客の安全確保に関する指針(ガイドライン)」を策定した。

虻田町と洞爺湖温泉観光協会は6日、「観光客の安全確保に関する指針(ガイドライン)」をまとめた。ホテルや旅館などの宿泊施設に避難用ヘルメット、防じんマスク、避難マップの常備を求めており、今後の営業再開に役立てる。

同様のガイドラインは、既に営業再開している壮瞥町が策定し、観光客を安全に迎え入れることに生かされており、虻田町洞爺湖温泉街も足並みをそろえるため、町の災害対策本部と同協会が協議して取りまとめた。

同ガイドラインは、(1)各部屋にヘルメット、防じんマスク(タオル)を常備(2)各部屋に避難マップを常備(3)各部屋の出入り口に避難マップの提示(4)対策本部から伝達された火山情報の提供 - などを盛り込んでいる。同ガイドラインに基づき、各ホテル・旅館には観光客を安全に誘導するための「有珠山噴火緊急避難誘導要領」を策定し、町に提出することも求めている。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.259]

02. 7月22日、虻田町は洞爺湖観光協会と協力し、緊急避難マップを作成、営業を再開しているホテルに配布した。

有珠山噴火後、「観光客の安全確保に関する指針」(ガイドライン)を策定した虻田町は、

同指針に基づく安全対策として、洞爺湖温泉観光協会と協力して、緊急避難マップを作製した。客室常備用は、すでに営業を再開しているホテルに配布された。

今回は、B5判の客室常備用1万部と施設出入口のポスター用500部を作製する。(中略)各宿泊施設から壮瞥方向と月浦方向に避難する道順のほか、緊急避難場所となるホテルの場所、立入り禁止区域などを掲載。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.273]

03. 7月27日に洞爺湖観光協会が「洞爺湖温泉復興特別委員会」を設立し、復興に向けた各種の取り組みをすすめた。

復興特別委員会が活動を開始していくこととなり、旭ホテル社長が委員長となる。(中略)この委員会の人選も一任され、当初10人の委員はさまざまな業界や階層の人々の参加を得て活動に取り組んでいく。当初の復興の取組は、いくつかのイベントを取組み、これを噴火報道と組み合わせて実施することによって洞爺湖温泉の復活をアピールし、観光客の誘致に結び付けようとするものであった。主なイベントとしては、7月29日 - 8月4日の道庁赤レンガにおける物産販売と観光PR、9月18日広域観光座談会、9月30日昭和神山で「感動市場」開催、12月31日21世紀カウントダウン、3月31日一周年記念シンポジウム、4月28日 - 5月4日「MOVE 洞爺湖 2001」などがあげられる。

こうしたイベントと平行して、復興した洞爺湖温泉をアピールするための誘致キャンペーンも行っていく。

(中略)

復興特別委員会は二つの部会を設け、誘致部会は上述のようなイベントの開催や誘致キャンペーンなどの活動を通じて観光客の回復を図るとともに、復興部会では飲食店や土産店の店主と懇談会を設け、現在抱えている問題をよい方向で解決する努力をすることとした。[奥田仁「有珠山噴火と虻田町の観光・雇用」『開発論集 第72号』北海学園大学開発研究所(2003/6),p.44]

04. 8月3日、有珠山復興観光キャンペーン「観光ルートマップ」を作成した。

有珠山復興の観光キャンペーンに取り組んでいる胆振観光連絡協議会は、管内の観光ポイントへのルートを紹介したパンフレット「いぶりルートマップ」5万枚をこのほど作製した。

パンフはA3判サイズを2つ折りにした形。表に胆振全体の道路地図を入れ、「来て！観て！元気＆パワフルな北海道・いぶりへ！」のキャッチフレーズで、有珠山噴火被災から復興への印象付けを狙っている。

(中略)これから開催される道内の各種イベントや、道内外の旅行代理店などに配布し、胆振観光の健在ぶりをPRしていくことにしている。[『室蘭民報』(2000/8/3 朝刊)]

05. 8月5日、壮瞥町・同観光協会が首都圏観光キャンペーン「壮瞥町は元気です」を開催した。

町と町観光協会、関東そうべつ会の3団体が地元産業の柱である観光の復興をアピールする。噴火活動は沈静化し、終息に向かいつつあるものの、修学旅行や各種団体旅行が中止され、観光客が激減。地域経済の危機を突破するため、道、壮瞥町、昭和新山、洞爺湖のイメージアップを図り、集客の呼び戻しを狙う。

(中略)

池袋サンシャインシティでは、「見舞い激励ありがとう・壮瞥町は元気です」との内容が書かれたパンフレットの配布や、北の湖親方と山中町長、阿野会長によるPRトークショー、町内へのペア旅行やメロン、ジャガ芋などが当たる抽選会などを展開する。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.278]

06. 2001年3月31日、洞爺湖温泉観光協会が噴火一周年イベント「洞爺湖 IN 再生への序曲」を開催した。

有珠山噴火から1年がたった31日、最大の被災地になった虻田町洞爺湖温泉町で「復興への活力」を盛り上げるイベント「洞爺湖 IN 再生への序曲」(洞爺湖温泉観光協会主催)が開かれた。会場の洞爺湖文化センターには被災住民のほか、「マグマの活動は終息した」(北大・岡田弘教授)との『安全宣言』を受け入れた観光客の姿も。手作りの多彩なイベントを楽しみ、春浅い洞爺湖温泉街にいっぱいの笑顔を咲かせた。阪神大震災からの復興が進む神戸からの『元気』も届けられた。[『室蘭民報』(2001/4/1 朝刊)]